いのちの尊厳　陸前高田での語りをとおして考える

The Dignity of Life: Considered through The Narratives of the People in Rikuzentakata

松山　真
MATSUYAMA Makoto

要約

東日本大震災を契機に、研究休暇を利用して1年間陸前高田市で生活することにより、その文化、風習、歴史などについて身を持って感じた。陸前高田は、全ての人のwell-beingが目指され信頼感が醸成される「結束した社会」であった。そのため、自分と他者のいのちの大切さ、人の内在的価値の重要性や存在するだけでいいというBeingの価値を実感することが出来る地域である。陸前高田の人々の語りをとおして、結束した社会と学部の理念である「いのちの尊厳」について考察した。

キーワード：陸前高田、結束した社会、人間の尊厳、いのちの尊厳

Abstract

After the Great East Japan Earthquake, I used my Sabbatical to live in Rikuzentakata City for a year, and felt firsthand its culture, customs, and history. Rikuzentakata is a “cohesive society” where the well-being of all people is aimed at and a sense of trust is fostered. Through the narratives of the people in Rikuzentakata, I considered the cohesive society and the philosophy of the Faculty, “the dignity of life”.

Key words: Rikuzentakata, cohesive society, dignity of life

はじめに

2011年3月11日、東日本大震災が起きた。筆者は学部に設置された『コミュニティ福祉学部東日本大震災復興支援プロジェクト』に属し、活動拠点となった陸前高田を10年間担当した。1000年に一度といわれたこの震災に対して、個人として何が出来るのか、自分が専門とするソーシャルワークは何が出来るのかを確かめてみたいという気持ちが強かった。奇跡的に小友(おとも)町にあったS氏宅を借りることが出来た（以下、サポートハウス）。家主は八王子在住で、年二回ほどしか来ないので、家電も布団も家財道具もそのまま使ってもいいと言って下さり、多くの団体が3時間ほど掛けて陸前高田に通っている中、トイレも風呂もあり、畳に布団を敷いて寝ることが出来た。津波到達地点からわずか200mほど坂を上がった場所だった。この家を最大限使うことも考え、2012年度に研究休暇を申請し、1年間教育から離れ陸前高田に住み活動することにした。

陸前高田での生活は「被災地に住む」というある種覚悟が必要である。ことばも風習も異なる東北の地で、誰一人知った人も居ない、何をするかも決まっていないという不安もあった。しかしそれよりも、被災体験の無い人間が被災地のただ中に住むことのある種後ろめたさと、家を貸して貰えたことへの責任も感じながら覚悟を持って住み始めた。人間関係を作りながら、コンビニも何も無い不自由な生活を共にしつつ、土地に馴染む、土地の溶け込むことを第一優先に考え、人を見たら挨拶する、家に上がれと言われたら上がる、食べろと言われたら食べることで人間関係をつくっていった。

しかし、実際に住み始めてみると、被災地としての悲惨な地域という意識は薄れ、人々の暮らしの豊かさを知ることになっていった。生活の不自由さはあるものの、この土地の持つ文化・風習・人間関係の在り方に魅了されたといっていいほどである。

本稿では、陸前高田で出会い、交流していた人たちとのエピソードを紹介しながら、その精神の根底にある人間観をソーシャルワークの原理、特に「いのちの尊厳」に関連付けて紹介することを目的とした。さらに、被災地として人口の1/10程度のいのちが失われ、市街地全てが消失するというまさに壊滅的被害を受けたにもかかわらず、人間を信じ前向きに生きる人たち、親しい人を失ったからこそ分かるいのちの尊さ、そしてそのいのちの尊さを必死に学生に伝えようとして下さる人たちを紹介したい。これらの人々との交流の中で学生たちは、人間の尊厳を実感し、受けとめていくことが出来た。筆者が『いのちの授業』と呼び学生たちの教育の場とした内容をまとめておきたい。

論文の書き方としては、陸前高田の人々の語りやエピソードを紹介し、それを解説する形式にした。

Ⅰ．人間を信頼しているコミュニティ

まず陸前高田における社会関係資本（Social Capital）の基本となる人間観についてみてみよう。

エピソード1

珍しく雪が積もった朝、近所を散歩しようとサポートハウスを出掛けた。裏山に上がる道で、一人のお婆さんがシャベルで凍った氷を剥がしていた。手伝おうかと近づいたときそのおばあさんはわたしに気付き「あんた、見ない人だね。」と言った。自己紹介しようとしたわたしに対して続いて掛けられたことばは驚きのことばだった。「あんた、見ない人だね。ばあちゃんとこ来て、お茶飲んでけ。」そのことばに驚きながら、誘われるまま家に入ると、玄関横のガラス張りの部屋のこたつにお爺さんが座って待っている。外のやりとりを全て見て待っている。「あがんなさい」と名前も訊かずこたつに招き入れる。コタツに座りお茶を出されてからようやく「あんたは誰？」となる。

これは驚くべきことである。自分の家の前を歩く見知らぬ男性に対して、名前や素性を探る前に「上がってお茶飲んでけ」と言う。その根底には、人を疑い探るということがない。知らない人だから一緒にお茶を飲み話してみよう、そして知り合っていこうと、人間を信頼し、見知らぬ人をもてなそうという気持ちが込められている。

エピソード2

借りた家には地デジアンテナが無くテレビは見られなかった。余震が多発しており地震情報を得るためにアンテナを立てることになった。市内の電気屋さんは、コンテナで営業を再開した人しか居なかった。そこを訪ね、消防団として津波が引いて瓦礫の山になった市街地で生存者捜索を行い、300人以上の遺体を見つけた、「みんな知り合いだ」という厳しい話を2時間ほど聴き、いよいよアンテナ工事と機器の設置を依頼した。家の位置を確認され「分かった。じゃあ時間が有るときにやっておくから。」と言う。「今度来るのは来月になるので、その時にやってもらえると助かるんですが。」

「あっ、いいよ。勝手にやっとくから。家開いてるんでしょ。」

確かにサポートハウスを管理されている隣家のK氏からは家の鍵を預かっていない。鍵を貸して欲しいと申し出たことがあったが「鍵なんか掛けないよ。鍵掛けたらかえって怪しいでしょ。」と一笑に付された。

家主が居ない他人の家に上がること、勝手に上がられて家の中を見られる、あるいは触られることについて、陸前高田の人たちはなんとも思っていない。それが当たり前だという生活をしている。何か盗られるなどという不安は無いのだろうか。そもそも家の位置を確認すると、「あー、あそこか。前はばあちゃん一人になってたけど、そのばあちゃんも亡くなって今は空いてるんだよね。」と詳しく知っている。おじいさんは前は何をしていて、その前のおじいさんはこんな人でと何代も遡ってその家の歴史を知っていることも少なくない。代々何十年、何百年と住み続けている家の人ばかりであり、互いに知り合いというよりも日常的に“知っている”のである。そ

のような社会では、プライバシーがないともいえるし、それだけ信頼しているともいえる。

陸前高田で生活してみて最も驚いたことは、上記のように人々が持っている「人間観」である。人そのものへの信頼関係があり、その上で人間関係が成立している。したがって経済的な利害関係や社会的地位や職業によって信頼するのではなく、同じ地域に住み続けている同じ一員として信頼しあっている。

エピソード3

陸前高田市には警察署がない。震災前から今も警察署は無い。あるのは「大船渡市警察高田交番」である。全国で警察署を持たない唯一の市といわれている。震災後ボランティアや復興工事を請け負う職人が多く入って来て治安が悪くなったといわれていた。それでも復興過程で警察署を設置するという考えにはならなかった。現在も高田交番しかない。もっとも、2階建てのビルでとても交番には見えないが。

エピソード4

魚屋さん（仮設店舗）に居た際に、窓が15センチくらい開いて「野菜置いてく」と女性の声がして葉野菜がスッと置かれた。慌てて魚屋さんが「じゃあ、これ持ってけ」と捌いていたカツオをお返しに渡そうとする。聞けば、こうして日常的に持っているもののやりとりをしているので、店で食べ物を買うことはほとんどないという。

エピソード5

住み始めて近所の仮設住宅や活動しているNPOなどの方々をサポートハウスに招き夕食会を開いた。なじみの魚屋さんに旬のカツオを捌いて貰い刺身にし、珍しい魚の鍋を用意した。来られた方々皆さんが「今日貰ったから持って来た。」とカツオを1本ずつ持って来られた。

ここでは、カツオに限らず「旬のものを旬のうちに食べる」という習慣があり、余ったら親戚や近所の配っていく。加工工場で製品にするとか冷凍して保存しておくという発想があまりなく、配るというのが文化になっている。

住民の関係が密であり匿名性のほぼないと思われる生活の中では、犯罪も抑止されている。震災後ボランティアなど多数の人が外から来るようになり治安の悪化が問題となったほど安全な街であった。

また、助け合うこと、おもてなしすることが日常的に当たり前に行われている。「アワビや帆立は震災になって初めて買った。こんなに高い物だと知らなかった。」「いい物は貰って食べるものだと思っていた。」と多くの人が口を揃えた。自分の庭に自分たちが食べるくらいの畑を造り、スーパーで買わなくても食べるものには困らないというくらい、物々交換も行われている。代々この土地に住み、同じコミュニティに生きる人として信頼している。その信頼関係は、豊かな社

会関係資本となり住みやすい街を形成している。

エピソード6

住んでいた地区の集まりがあるから来るようにと案内があり、地区自治会館に行った。陸前高田では、20戸から50戸くらいを単位として「地区」があり、「地区」の方々がお金を出し合い自治会館を建てている。ゴミ収集の管理をしている地区もある。わたしの住んだ地区は25戸あり、集会場がある自治会館を持っていた。

行ってみるとたくさんの人が集まって来た。19時になり集会が始まったが、「今日は特に話はないです。Sさんの家に立教大学の先生が住むことになったからみなさんよろしくお願いします。」と紹介があった。「立教大学の松山です。これから1年間ここに住むことになりました。時々学生連れてきますので、よろしくお願いいたします。」と挨拶すると笑いが起きた。この地区名は「松山地区」、自治会館は「松山会館」だったのだ。

なぜ議題が無いのに集まるのか尋ねたところ「そういう決まりなんだ。毎月25日に全員集まることになっているから。」という回答だった。集まる目的も明確ではないにもかかわらずもう何十年もこうして毎月25日に、全ての家庭から人が出て集まる。全員男性であったが、夫の都合が悪い時には誰か他の家族が代理で出席するという。なぜこのような決まりが出来て、それを何十年も継続して来たのだろうか、疑問に思った筆者が数人の方に尋ねると、「納税組合の名残だな」とする方が居た。銀行振り込みがなかった時代に、国保税の徴収を確実に行うため各自治会にその徴収が依頼され、地区の自治会がそれを担っていたのだそうだ。そのため毎月25日に国保税を持って集まっていたのだ。その仕組みがなくなったあとも、毎月顔を合わせることを何十年も行ってきた地区の人間関係の密さは計り知れない。

陸前高田という市、あるいは合併前の町村、下部組織としての町やコミュニティや地区を理解するには、こうした日常的に人間関係が濃密であることを理解していなければならない。人口2万人弱の市で、互いに名前も顔も分かるだけではなく、二重三重に関係し合うようになっているシステムや風習によって、密で強い人間関係が形成されている社会となっている。こうした生活をしていた人々に巨大津波が襲い、多くの人命を奪いコミュニティを破壊していったのである。この地域での震災の悲しみの深さを想像するためには、元々この地にあった人間関係の濃密さを理解していなければならない。

一方、こうした社会では、家族構成はもちろん様々な家庭の事情も筒抜けとなる。それを敬遠するようになってきているが、震災時はこのことが機能して助け合いが行われた。

Ⅱ．結束した社会[(1)]

こうした人間関係が密なだけでなく、他者に対して根本的に信頼している社会を「結束した社会」とみることが出来る。OECDによると、「結束した社会では、すべての人のウェルビーイ

ングが目指され、排除や周縁化と闘い、帰属意識が高められ、信頼が醸成され、すべての人々に上層への社会移動の機会が与えられる。」としている[(2)]。さらに、社会的結束は、社会的包摂（social inclusion）、社会的関係資本（social capital）、社会移動（social mobility）の3つの重要な面から捉える、としている[(3)]。社会移動は別として、陸前高田では、豊かな社会関係資本を基に社会的包摂が自然となされてきたと言える。600年から900年続くとされる祭りでは、毎年町ごとに何ヶ月も掛けて山車を造り、競って山車をぶつけあったり山車を飾って練り歩く。その祭りは、単にイベントとしての祭りではなく、地区の住人が数ヶ月掛けて共に準備をするなど、日常生活の中にある祭りといえる。祭りの会場も街のメインストリートを使って行われることから、多くの人は家を出ればそこが祭りの会場でもある。祭りの準備も参加も近隣の人たちとの共同生活の一部になっていると捉えることができる。こうして町への帰属意識が高められていく。さらに、町の中には20戸から50戸程度ごとに地区が定められ、その地区ごとに独特の踊り（手踊り、剣舞、虎舞の三種）がある。地区ごとに練習し年に一度踊り、4年に一度全地区が踊りを披露する催しが開かれる。誰に見せるでも無く地区の生活の中にそれが組み込まれている。このことは、その地区に嫁に来た人は、前に住んでいた地区の踊りではなく、その地区の踊りを覚えなければならないということになる。こうしてその地区へ否応なく組み込まれ帰属意識を持つようになっていく。さらに毎月同じ日に地区の家の者が全員地区会館に集まる。こうしたことが日常の中で当たり前のこととして、何十年も百年以上続いている地域なのである。それが互いの信頼感を醸成し、震災前まで自然の恵みを皆で分かち合う風習が自然に出来上がっていた。

厚生労働白書では、Social Cohesionを「社会的つながり」と訳している[(4)]。「社会的つながり（Social Cohesion）は、国民の社会参加の程度や、日常生活から得る満足度等を反映しており、投票や社会活動への参加状況、意識調査の結果などにより測定される。」とした上で、日本は、犯罪率が低く、治安面での問題が少ない反面、生活や社会への満足度が低いなど多くの問題を抱えているとまとめている[(5)]。しかし陸前高田では、意識調査など都会向けの指標によって示すまでもなく、社会的つながりが密であることは明らかである。

陸前高田市に警察署が無いということが、まさに犯罪率が低く、鍵を掛けない家に他人が出入りするという生活が成立するほど、人間を信頼して生活し「社会的つながり」が密であることの現れである。また、陸前高田市は復興のもう一つの柱として『ノーマライゼーションという言葉のいらないまちづくり』を掲げ[(6)]アクションプランを策定した。このアクションプランの特徴は、対象を「陸前高田に関わるすべての人」であるとしていることである。「ノーマライゼーションという言葉から多くの人が連想する、弱者に対する福祉的配慮を推進するものではなく、全ての人にとって住みやすいまちとはどうあるべきかを一人ひとりが考え」、取り組むことを目指すとした[(7)]。新しい街をつくり上げていく復興計画のソフト部分として重要視したのである。理念には「差別や区別、不利益な扱いを受けないこと」、「自分らしい生き方を実現することが出来ること」、「誰もがあらゆる活動に参加する機会が確保され、地域共生社会の一員になること」の三点が掲げられている。アクションプラン作成に当たっては、未来を創っていく小・中・高校

生にも生活の中での具体的な要望を聞いて採り入れた。陸前高田が長い時間掛けて獲得していた結束した社会を未来にも繋いでいこうという考えである。結束した社会が再び形成されることを願ってアクションプランが定められたといえる[8]。

Ⅲ．多様性尊重と社会的結束について

三島は『多文化主義から〈多様性尊重〉+〈社会的結束〉へ――イギリスの事例』という項を立て社会的結束と多様性尊重の関係について述べるとともに、「多様性尊重は、ある意味社会的結束と表裏をなすものといえる」とした上で、多様性尊重の起源について詳細に解説している[9]。本稿は多様性尊重について考察することを目的としていないが社会結束と密接に関係する概念として紹介しておきたい。紙面の都合上引用は出来ないが多様性尊重とは何かを考える際に非常に興味深い論文である。

簡略に要約すると、世界中に植民地を持った本国となるイギリス本土に、移民流入が増加し世界中から多様な人種、習慣などを持つコミュニティが形成されていった。一般的に互いに文化や風習が異なる集団では、不信感や警戒心などが生まれ自分たちの集団を守ろうとすればするほど排他的にもなっていく。さらに暴動やテロの温床にもなりかねないと考えられた。対立を避けるためにイギリス政府は差別を禁止しつつ、価値や目標をコミュニティ間で共有しイギリス人としてのアイデンティティを育むことで、社会的結束と多様性尊重の両立を目指すという考えが出て来たという。

陸前高田において、外から来た人たちに対して不信や警戒を持って接するのではなく「ばあちゃんちへ来てお茶飲んでけ」と積極的に招き入れ関わりを持とうとする姿勢。通りがかりの学生に、あるいは仮設住宅を訪ねてくる学生たちに対して、物に執着せずいのちを大切にするようにと諭すように話をする姿勢。いずれも求められて話すのではなく、求められていなくても積極的に伝えよう・関わろうとする姿勢がある。この姿勢こそ見知らぬ人・他の地域から来た人を排除しない多様性尊重の姿勢であろう。陸前高田は単に結束した社会というだけでなく、排他的にならずに結束した社会を保っていた希有な例ともいえる。

Ⅳ．いのちの大切さを実感する

エピソード7

2012年、旧市街地の大量な瓦礫処理が進められていく中、学生を連れて市街地中心地区に降り立った（高田町の元陸前高田駅から200ｍほどの場所）。学生に被害状況を実感してもらうために、自由時間として瓦礫の街を歩いて貰った。20分ほどしても帰って来ない学生を探しに瓦礫の山の間の道を行くと、ほどなくしてヘルメットを被り仕事をしている男性3人と向き合っている学生たちを見つけた。近づいていき「済みません、作業中に学生がお邪魔してしまって。」と言うと、男性たちは「今この学生たちに話してたんだが、地震が来たらすぐに逃げろって。ここは震災前自分たちの工場があった場所だ。ここに居て地震があって高台に逃げ

た。でも、逃げないやつがたくさんいた。車があるから、家族を見に行くからと逃げないやつらが津波で死んだんだ。だから地震があったら逃げろ。死んだら終わりだ。生きていればあとは何とかなる。物に執着したらだめだ。」

エピソード８

仮設住宅に住む方々と学生たちが交流する時間を設けていた。集会室の６畳の部屋に長い座机を広げ、学生と住民が座り、持って来たお菓子を出して話をする。住民の一人がすぐに学生に話し掛ける。

「地震があって、（この地区の人たちは）みんな高台に逃げた。上から見ていて、何も起きないから大丈夫だと思って戻っていった人たちがいた。先週車買ったばかりだからとって来る、猫が心配だから連れて来る、預金通帳とハンコを取って来る、と言って家に戻った人たちが居た。せっかく一度高台に逃げたのに、戻ったところに津波が来て亡くなった。だから、物はいいの。また買えるんだから。でもいのちは買えないの。何にも無くなっても、生きていれば何とかなるの。死んでしまったら全部おしまい。だから地震があったらすぐ逃げる、何にも無くてもいいからすぐに逃げるんだよ。預金通帳は再発行できるけど、いのちは再発行できないんだからね。」

この人たちは、いのちがかけがえのないもの、何より大切であることを直接語り掛けて下さる。津波が来たまさにその場所で、海が見える場所で直接聴くこれらのことばは学生に実感を伴って入り込んでいく。

また、人間にとって大切なものは物質（Having）ではないと強く訴える。人が後天的に獲得したものではなく、いのちそのものが重要なのだというメッセージを発して下さる。

おそらく学生たちは偏差値教育の中で育ち、能力主義と経済的価値を重視する社会で育てられてきた。人の価値は何から構成されるかと訊かれれば、いい大学に入ること、いい就職をすることそして高い給料を得て、バッグや衣服、車や家など物質的に恵まれた生活を送ること、すなわちHavingが重要であると回答するであろう。あるいは、成績や身体能力（Doing）が他の人より優れていることと考えるであろう。しかし、陸前高田の人たちは、それらよりも人間の内在的価値（Being）が最も重要なのだということを直接語って下さっている。会ってすぐに、人間として最も大切なことをまっすぐに語って下さる。お互いに名前も知らない、会ったばかりの人にこれほどまっすぐに大切なことを伝えて下さる。こうした機会はなかなか無い。これを『いのちの授業』と呼んでいた。

Ⅴ．人間の尊厳を実感する

エピソード９

仮設住宅や復興公営住宅の集会室にて、住民の方々と学生の交流の時間を設けてきた。何か

行事を行うのでは無く、持って来たお菓子を食べながら自由に話し交流する時間だ。

お菓子を持って訪問すると、お婆ちゃんたちを中心に学生を迎えて下さる。学生が座るとすぐにお婆ちゃんたちは学生の横に座りその手を取ってさすりながら「めんこいねー。」とニコニコ笑ってくれる。

「肌がすべすべだねー。わたしたちも若い頃はすべすべだったけど。」と笑わせながら、時には顔までなで回して「よく来たねー。遠かったでしょー。よく来たねー。」と迎えて下さる。

（サポートハウスは目の前に見えることから、古いことや石油ストーブしか無いことをご存知で）「夜は寒かったんじゃないの？ 今日はうちに泊まったら。エアコンもあってあったかいよ。」「きれいなお風呂もあるから入っていったら。」とまで言って下さる。

学生は未だ自分の名前も言っていない。自己紹介もしていないうちにこうして歓迎して下さる。分かって居るのは立教大学の学生だろうということだけだ。また、何かをしたことの対価として親切なことばが出て来たのでもない。何もしていないのにこうしたことばを学生に掛けて下さる。成績がいいのか、お金のある家なのか、お父さんが何をしている人か、得意なものは何か、そのようなことは一切関係がない。背が高いか低いか、痩せているか太っているかも関係が無い。もはや氏名も不要だ。ただ目の前に居るということをこんなにも喜んで下さる。

この体験は、ソーシャルワークの倫理綱領[10]の「人間の尊厳」の項に書かれている『すべての人々を、出自、人種、民族、国籍、性別、性自認、性的指向、年齢、身体的精神的状況、宗教的文化的背景、社会的地位、経済状況などの違いにかかわらず、かけがえのない存在として尊重する。』を現実に体験していることになる。

そこに行っただけで喜ばれる、何もしていないのに目の前に居ることを喜んで貰える。「居ること」「存在そのもの」というBeingを喜んで貰えるという体験をする。学生たちは復興支援というボランティアをしようとプログラムに申し込み、何かをしようと意気込んで参加したに違いない（Doing）。しかし、何もしていないのに、名前も知らない人からこんなにも喜んで貰える体験をすることになる。何もせず目の前に座ればいいのだ。その存在を互いに感じる時間になる。

そしてこうした体験を通じて学生たちは、自分自身の価値に気付いていく。常に人と比較して価値を考えてきた学生にとって、何もしなくてもいい、何も出来なくてもいいと、存在すること（Being）がすばらしいのだと直接語り掛けられ、手や顔をさすってめんこいと言われることで、自分が人間本来が持つ内在的価値を持っていることに気付いていく。その安心感と喜びから泣き出す学生もいる。常に何かしなければと考えていたが、何もしなくても価値があるというメッセージを受け取ることができる。

Ⅵ．陸前高田は、被災地としてではなく、いのちを考える場として記憶される

2016年5月27日、当時のアメリカ合衆国大統領バラク・オバマ氏が、被爆地広島を訪問した。

原爆を投下した国の大統領が、その地において何を語るのか、多くの日本人が固唾を飲んでことばを待っていた。オバマ大統領は「科学の発展は様々なことを可能にするが、一方で倫理的に革命を起こさないとそれらは殺人マシンになりかねない。」と科学の発展には倫理が必須であると語った後に、「広島がそれを伝える」とし、核兵器のない世界を希求する勇気を持つべきと訴えた。そして広島に来る意味を、亡くなった人々や、そこにあった日常を思い出すためだと語った[11]。

陸前高田を語る際に同じことが語られるべきである。オバマ大統領のことばを借りながら陸前高田を語るのであれば

『人類は全て、創造主によって平等につくられ、生きること、自由、そして幸福を希求することを含む、奪うことのできない権利を与えられている。全ての人にとってかけがえのない価値、全ての命が大切であるという主張、われわれは人類という一つの家族の仲間であるという根本的で必要な概念。われわれはこれら全ての話を伝えなければならない。

だからこそ、われわれは陸前高田に来たのだ。われわれが愛する人々のことを考えられるように。朝起きた子供たちの笑顔をまず考えられるように。食卓越しに、夫婦が優しく触れ合うことを考えられるように。両親の温かい抱擁を考えられるように。』[12]

Ⅶ．おわりに

陸前高田市は、1000年に一度の大地震、それに伴う高さ15mを越える津波により壊滅的被害を受けた。市街地はいくつかのコンクリートの建物を残し全て破壊され流されてしまった。人口の約1/10に近い1,557名の尊い命が失われた。そして未だにその遺体が発見されていない人が陸前高田市だけでも202人にのぼる。

12年が経過し、津波被害の痕跡は震災遺構として残された建物に残されているものの、街は10m以上地面の下になり、新しい建物が次々に建てられてきた。復興という名においてハード面は整えられてきたのであろう。しかし、陸前高田という結束した社会での生活は継承されていくだろうか。

陸前高田は、悲惨な被災地として記憶されるのでは無く、結束した社会として記憶されていくことだろう。またその共生社会の居ゴコチ良さを実感するために陸前高田を訪れ、人々との交流が図られるよう願う。陸前高田の人々と交流することで、自分と他者のいのちの大切さを考え、自分が生きている日常の素晴らしさを再認識することができる。

引用文献

(1) IFSW（2014）『ソーシャルワークのグローバル定義』（日本語訳版）日本社会福祉教育学校連盟・社会福祉専門職団体協議会訳

「社会的結束」Social Cohesionは、「ソーシャルワーク定義」においてソーシャルワークが行う4つの機能の一つとして定義本文に書かれているほど重要な概念である。

(2) OECD編高木郁朗監訳（2017）『Society at a Glance 2014」OECD、図表でみる世界の社会問題1　OECD社会政策指標』、明石書房

(3) 三島亜紀子（2016）『ソーシャルワークのグローバル定義における社会的結束（Social Cohesion）に関する考察　リスク管理がもたらすジレンマ』、ソーシャルワーク学会誌第33号

(4) 厚生労働省（2012：87，88）『厚生労働白書　平成24年版』

(5) 厚生労働省（2012：120）『厚生労働白書　平成24年版』

(6) 陸前高田市（2015）『ノーマライゼーションという言葉のいらいないまちづくりアクションプラン』

(7) 同上　p.2『対象について』

(8) 筆者はこのアクションプラン作成に関わり監修を担当した。

(9) 三島亜紀子（2016）『ソーシャルワークのグローバル定義における社会的結束（Social Cohesion）に関する考察　リスク管理がもたらすジレンマ』、ソーシャルワーク学会誌第33号

(10) 社会福祉士会（2020）『社会福祉士の倫理綱領』

(11)『オバマ大統領演説』、産経新聞、2016年5月27日

(12) 同オバマ演説の「広島」を「陸前高田」に置き換えた。